
IS ～ 頑張れば何でもできる！ ～

戦場の絆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜頑張れば何でもできる！〜

【Nコード】

N3869X

【作者名】

戦場の絆

【あらすじ】

見つけてくださってありがとうございます。

これは「IS〜インフィニット・ストラトス〜」の二次小説になります。

はじまり

「この世で一番強いのは女」

女尊男卑の現代社会において、そんな言葉は、どこでも耳にする言葉である。

IS——正式名称『インフィニット・ストラトス』——これは、俺の姉で科学者の篠ノ之束——俺はたばっちと呼んでいる——が開発した、宇宙開発用のマルチフォーム・スーツだ。といつても、宇宙開発用という使用目的は、とうの昔に忘れ去られたが。

十年程前、突如として十カ国以上の軍のコンピュータがハッキングされ、各国の軍事施設から、合計2361発のミサイルが日本に向けて発射されるという、前代未聞のテロが発生したのだが、突如現れた一機のIS『白騎士』がミサイルのほぼ半数を『ぶった切り』、それ以外の物は、当時試作段階であつた荷電粒子砲を『召還』して打ち抜いた。

超音速での格闘、大質量の兵器を粒子から構成し、さらにビーム兵器の実用化。

勝てる現行兵器がないという事実、揺るぎのないものだった。

近隣各国は国際条約を無視し、白騎士の分析と捕獲、もしくは撃墜の為に日本へ偵察機を飛ばした。が、白騎士はその大部隊を相手に無傷で立ち回るばかりか、相手の戦力だけを奪って人命を守るなどという荒業を簡単にやってのけた。

これだけの大部隊でも、操縦者が死なないように手加減できる事を

見せつけられては、世界はどうしようもなかった。

そして日没と共に、白騎士は完全にその姿を消した。

完璧なジャミング能力を駄目押しとばかりに見せつけられ、世界はISに敗北したのだった。

これにより、ISの持つ軍事的な力が注目され、各国はIS運用の為の『アラスカ条約』を締結、技術公開義務やISのコアの保有数等を規定し、また日本に、IS操縦者育成機関『IS学園』を設立させた。

この学園は、世界中の殆どの法律の適応外にある法的機関であり、また、ここで得たデータは公開の義務がない為、企業や国家代表候補生が専用機を渡され、データ取りの為に生徒になっている場合が多い。前述の公開義務に反発する団体がいないように、妥協点となっている。

そしてたばっちは、世界でただ一人ISCOAを制作できる人間でありながら、468個目のCOAを作った時点でその姿を消した。そして、当時まだ幼かった俺は、たばっちと共に旅に出たのだった。

以上、説明終了。

「50点!」

「手厳しいな!」

たばつちに今までのISの歴史を話したが、点数はお察しだった。

俺の名前は篠ノ之智樹。前述した通り、たばつちこと篠ノ之束の弟だ。今はたばつちの元で、ISの技術を学んでいる。

「ともくん、GNドライブはどう？」

「粒子生成は順調だよ。圧縮時の毒性も無くなったしね。俺は実用化できるレベルだと思うてる」

GNドライブとは、俺がたばつちの協力を得て、初めて作ったISCコア。理論上半永久的に動力となるGN粒子を出し続ける。

このGN粒子は圧縮することで動力、攻撃、推進、さらには質量軽減効果までも発揮するため、推進剤やエネルギーの外部供給が不要となり、軽量化を実現するのだ。

GNドライブは全部で5基製造しており、その内の1基は既にISに積んでいる。

『GN-0000ガンダム』

名称であるガンダムは、銃(GUN)と自由(FREEDOM)からの造語。GNドライブ搭載型ISのプロトタイプとして設計したものだ。各種実験装備の搭載、運用テストもこの機体で行っている。『小型ビームガン』『試作型ビームサーベル』『ガンダムシールド』を基本装備とし、オプションとして『ビームランチャー』、実体剣の『GNプロトソード』を用意している。

小型ビームガンは射撃時の粒子圧縮率や威力の検証、試作型ビームサーベルは圧縮粒子の固定技術の確立、ガンダムシールドはGNフ

イールドと呼ばれる防御用の粒子防壁（刀身にGN粒子を纏わせた実体剣には無力）の検証、ビーム・ランチャーは大火力ビームの実用化の為、GNプロトソードは対GNフィールド用の粒子コーティング技術確立の為に、それぞれ制作されたものだ。

「じゃ、エクシアの制作に入るのか」

「よっしゃ」

『GN-001 ガンダムエクシア』

対IS近接戦闘用の機体である。コンセプトは高速一撃離脱で、機体の軽量化と高剛性化が成されている。ビームガンとGNプロトソードを組み合わせ、ソード部分を折り畳むことでライフルモードとソードモードの切り替えができる『GNソード』、腰部に二振りマウントされた大小の『GNブレイド』、両肩部ラッチに一振りずつ装備された『GNビームサーベル』、尻部ラッチに二振り装備された『GNビームダガー』、格闘戦時の打突も考慮し、楕円状にされた『GNシールド』が装備として用意されている。

以上、機体説明終了。

そして、俺は淡い緑の光を放つGNドライブの内の一つを手にとった。

「……ん？」

心なしか、ドライブの光が強くなった気が――

「ってわあああっ？」

「ちよっ、ともくん!？」

GNドライブから大量のGN粒子が吹き出し、俺の体を呑み込んで

いく。

「光が……広がっていく……」

「こんなときにボケ!？」

光が少しずつ収まり、やがて殆ど消えた時、俺の体には信じられない事が起きていた。

「ともくんがエクシアになってる!」

はじまり（後書き）

1話（という名のプロローグ）終了です

感想お待ちしております。

幼馴染と気になるあの子

『男性IS操縦者、二人現る!』

今日の新聞の一面に、俺と幼なじみの織斑一夏——たばっちはいつくんと呼んでいる——の顔写真がデカデカと載っていた。

「ついに公表したのか……」

「うん。その方が面白いから」

たばっちの言動に、俺は思わず閉口する。

俺がISを使用できることが判明したその翌日、たばっちは俺の顔写真とISを装着している写真を、自分の音声と共にマスコミに公開した。そのせいで、俺はIS学園への入学を余儀なくされてしまった。

同時期に一夏もISを動かし、IS学園への入学が決定してしまったらしく、この二ユーは世界中を揺るがしたのだった。

「エクシアはもうできちゃったし……白式でも弄ろうかな？」

「白式？ 倉持の欠陥機をか？」

『白式』

元々は倉持技研という所で作られていた第3世代型ISだ。単一仕様という、操縦者とISの相性が最高となった時に、ISが作り出す特有の現象を、より簡単に発現させるのが目的のISだったが、欠陥機として放棄されてしまった。これをたばっちが倉持に掛け合って回収し、今も暇潰しにちよくちよく弄っているのだ。

「で、今度はどうするの？」

「この機体を、いつくん色に染め上げるんだぜ」

「なるほど、貴重な男性IS操縦者のデータ取りって理由を逆手にとって、倉持所属のISとすることであいつに預けるのか」

「それだけじゃないよ。武装の《雪片式型》に《展開装甲》を付けてみるんだ」

『展開装甲』

たばっちが開発した装甲兼エネルギー発生装置。必要に応じて展開、エネルギーを放出することで、攻撃、防御、推進の全てを司る第4世代型ISの装備。だが、まだ試作段階。

「雪片式型に？ 展開装甲のプロトタイプにするつもりか？」

「そうだよ。あと、箒ちゃんもIS学園に入るみたいだから、専用機を作ってあげようと思ってね」

実はたばっち、極度のシスコンである。が、たばっちが姿を消した後、箒ちゃんは政府の指示で各地を転々とする羽目になり、結果箒ちゃんはたばっちを拒絶する事になってしまったのだった。

「……受け取ってくれるかどうか」

「箒ちゃんが欲しいって連絡してきたらあげるんだ。無理に押し売りする気は無いからね」

にしても、一夏に箒ちゃんかぁ。これは案外楽しめそうだなあ。

IS学園、入学の日。

俺は、所属する事になった1年4組で、周りからの視線に辟易としていた。……今ほど一夏に会って話がしたいと思ったことはない。あ、BLじゃないよ。

ちなみに、今自己紹介をやっているところだ。

「更識簪…です。宜しくお願いします」

セミロングの髪に、ISヘッドギアのような髪飾り。長方形のメガネを掛けた彼女は、どこか儚く見えた。

さっきまでの元気な子たちとは対照的なその表情が、箒ちゃんと若干被って見えた気がして、俺は今度声を掛けようかな、と思った。……そういえば箒ちゃん、元気にしてるかな？

「次、篠ノ之君お願いします」

—— おっと、俺の番か。ここは無難に行こう。

「篠ノ之智樹。ご存知、篠ノ之束の弟です。趣味はIS関連と料理です。……まさか、自分がこうなるとは思っていませんでしたが、宜しく願います」

クリア。だが、周りの視線は変わらない。まあ、とりあえず耐えるか。

このIS学園は、入学日から早々に授業がフルにある。日本での扱いは高校だが、通常授業に加えてISの知識、技術まで磨かなくてはならないからだ。

そんな訳で、現在1時間目は数学なのだが、正直楽勝である。

ISに触れる中で、こういう事は自然と出来るようになっていたの

だ。ノートを取る事も、特に深く考えて解く必要もない。
ただ問題なのは、俺が男だからなのか、先生の指名が俺に集中する
事だ。別に当てられる事自体はいいんだが、ほぼ全部とか何なんだ
よ。イジメかこれ？

1時間目は無事に終了。

一夏と箒ちゃんは1組なので、俺は1組まで最速でダッシュした。

「一夏！」

「智樹か！ 久しぶりだなあ」

俺と一夏は堅い握手を交わす。

「智樹か。久しぶりだな」

「箒ちゃん！」

箒ちゃんも加わり、軽い同窓会気分だ。……まあ、そんな年取って
はないが。

「にしても、何で一夏がISを……藍越学園受けるつもりだったん
だろ？」

「……藍越学園とIS学園って、似てるじゃん？」

……バカだこいつ。

と、箒ちゃんが切り出した。

「済まんが、一夏を借りて行くぞ」

「ああ。色々話したい事もあるだろうしな」

実は箒ちゃん、一夏の事が好きなのだ。本人は素直に言えないようだが。

一夏が連れて行かれたので、取り敢えず4組に戻る事にした。

幼馴染と気になるあの子（後書き）

第二話終了。

感想お待ちしております。

前途多難

昼休み。

俺は女性陣の質問に受け答えしていた。持ってきた弁当は、未だに食べていない。

実は、俺は人と話すのはあまり得意ではない。たばっちがまだISを發明していなかった頃、俺は小学校に通っていたが、その時に結構陰湿なイジメの対象になり、それ以来他人が苦手になってしまった。具体的に言うなら、1対1はまだ大丈夫だが、1対多が苦手になってしまったのだ。

そんな俺にとって、今の状況は、いわば拷問とも言つべきものだった。

「そう言えば、篠ノ之博士ってどんな人なの？」

と、女性陣の一人が質問してきた。

「智樹君って博士の弟なんだよね」

「何でもいいから、教えてよ」

便乗するように他の子も質問してくる。……ジョーカー切ろうかな。

「質問に質問で返すのは悪いんだけど、1ついいかな？」

「何？」

「みんなはISって何だと思ってる？」

「え……世界最強の兵器……かな？」

「元々宇宙開発用だったのが兵器に転用されて……って事？」

まあ、テンプレだった。

「世界最強、ねえ。俺にとってはただの欠陥機でしかないけどね」

確かにISは強いが、女性、しかも適性のある女性にしか使えないなどという欠陥を抱えている。

まあ、これを言ったところで何かしら反論されるのが今の世の中ではあるが。

「彼女は、世界が嫌いなんだ。世界は歪みきつていて。いつの時代も、酷い人間ばかりだとね。彼女は暇だった。暇だったからこそ、あの人は暇つぶしにISを作った。自分の作ったモノで、世界がどんな風になるか、試してみたんだ。結果は……結局強い力を持って傲慢になる奴と、強い力に萎縮して黙り込む奴の二つを生んだだけだったがね」

俺の言葉に、みんなが黙り込む。ちよつとまずかったかなと思って、俺は空気を変えようと言葉を発した。

「それはそうと、今からご飯食べるんだが、一緒に食うかい？」

「じゃあお弁当持ってくるから、ちよつと待ってて！」

『私たちもいいよね？』

「勿論だ」

ちょうど隣の席でパンを食べている更識さんに、一人の女子が「あなたもどう？」と声を掛けたが、拒否されてしまったようだ。――

――なるほど、彼女は一人飯が好き、と。メモメモ。

「智樹君、それ自分で作ったの？」

「おう。簡単な物だけだな」

俺の弁当は、昨日たばっちと食べた夕食の残りと卵焼き、ミートボールだ。……あ、たばっち明日から食事どうするんだろ。

今日から寮生活だから家には戻れない。食事は専ら俺が作ってたし、たばっちそ

こまで料理上手くないし。

「その卵焼き分けてよ」

「いいけど、何かと交換な」

「うん。じゃあこの唐揚げあげる」

「そのミートボールちょうだい。このシューマイと交換で」

「おう」

分け合いをしながら、俺たちは楽しくランチタイムを過ごした。分けてもらったおかずは結構レベルが高く、なかなか美味しかった。

放課後、みんなが寮へ帰って行く中で、俺はノートパソコンを開いていた。興味津々に見てくる子もいれば、じゃあね、と言っただけ言っただけ帰って行く子もいる。

まあそんなことはいいとして、何をしているのかと言うと、GNDライブ搭載型ISの事だ。先日、2機目（計画では4機目）のプランが決まり、設計をしているのだ。

『GN-005 ガンダムヴァーチェ』

大火力砲撃による殲滅戦を主眼に置いたIS。機体はかなりの重装甲にしているが、GN粒子の質量軽減効果によって軽量化が実現する。今の所机上計算だが、重量は一般ISの2割増程度に押さえられている。その装甲の内側には大容量粒子貯蔵コンデンサーが多数内蔵されており、後述する大火力武装の使用によって発生する慢性的な粒子不足をカバーしている。また、一部コンデンサーを露出させ、機体全体に『GNフィールド』という、GN粒子を使用した防壁を展開することによって、高い防御力を有している。

そして、GNドライヴ搭載型ISが敵に回ったりしたときなど、有事の際には装甲をパージし、真の姿である『GN-004 ガンダムナドレ』となる。装甲をパージしたことによって機動力が上昇し、苦手な近接戦もカバーできる他、敵性ISのコントロールを奪取するジャミングシステム『トリアルシステム』が実装されている。

但し、装甲と共にコンデンサーを切り離してしまったため、この形態での経戦能力は著しく低下するのが弱点である。

武装は、0ガンダムのビームランチャーで得られた技術をフィードバックし、威力、射程を重視し、さらに胸部GNドライヴに直結することで強力な一撃をも放つことが出来る『GNバズーカ』（粒子消費量が大きく、ナドレ時には使用不能となる）、両肩部に二門1セット、合計2セット装備され、粒子消費量が比較的少ないのでナドレに移行した際に主武装となる『GNキャノン』、自衛用に二振り装備された『GNビームサーベル』がある。

……それにしてもこのGN粒子、本当にチートである。圧縮率を変えただけでISに必要な大体の事ができるのだから。

（G《頑張れば》N《何でもできる》粒子、ってか）

オヤジギャグではあるが、実際にそうなのだから困る。

（あ、もうこんな時間か）

作業開始から、すでに1時間が過ぎようとしていた。

窓から見える空はほんのりと茜色に染まり、もうじき日が沈む事を表している。

俺はパソコンを片付け、席を立とうとした。

（あ、更識さんまだ残ってたのか）

隣の席には、携帯端末を見つめる更識さんの姿があった。ちよっとその端末を覗く。

（あ、ウルトラマンだ）

そこには俺が幼い頃から憧れていたヒーローの姿があった。

「更識さん、ウルトラマン好きなんだ」

「！」

話しかけてみたら、びっくりされた。……集中しているところにいきなり声掛けたら、そりゃびっくりするか。

「あなたも……ウルトラマン好きなの……？」

「ああ。ちっちゃい頃から大好きなんだ」

俺の声に、表情を若干緩ませる更識さん。

俺はしばらく、更識さんとウルトラマンについて語り合った。

「クアंटムストリームの構え格好良いよな」

「それに限らずガイアには格好良いポーズがいっぱいある……フォトンエッジとか——」

「おお、更識、篠ノ之、ここにいたか」

若い女性の声に振り返る。

担任の森本美智子先生がそこにいた。男勝りの口調に熱血な台詞回しが特徴。

「二人に寮の部屋の鍵を渡すのを忘れていた。これだ」

男のような口調でそう言いながら、先生は俺と更識さんに鍵を渡した。

「1022番か」

「私も……1022番」

……何だって？

「ああ、篠ノ之の入学が急だったから、寮の部屋割りに苦労することになった。しばらくは更識と相部屋になるけど我慢してくれ。二人の荷物は部屋に運び込んでから、後はお前たちで荷ほどきをしておけよ」

「は、はあ……」

……どうしてこうなった。

「取り敢えず、部屋に行こうか」

「う、うん……」

妙に気まづくなりながら、俺たちは一緒に部屋まで向かった。

その後、一緒に生活するということで、部屋での決まりを決めた。

- ・お風呂は更識さんが先に入る

- ・着替える時は、風呂場と便所に隣接する更衣室にて着替える（追記：この時鍵を閉めるので、部屋から便所に行くことが出来なくなる）

- ・夕食は食堂、もしくは俺と更識さんで手作り

ざっとこんなところだ。

出会ったばかりの女子との、いきなりの共同生活。前途多難かなあと、俺は溜め息をついたのだった。

前途多難（後書き）

第三話終了です。

感想お待ちしております。

更識簪

人間は何故夢を見るのか、という事を考えた事はあるだろうか。これは、それまで蓄積した記憶を整理する為なのだと、何かで耳にした。

では、人間は何故、寝ている時に見た夢を忘れてしまうのだろうか。こればかりは聞いた事も、調べた事も無いので、どうとは言えないのだが。

こんな事を考えたりするのは、今日の夢が、何かとても重要な事のはずなのに思い出せないからだ。
臍気にすら覚えていないのだが、何か幸せな気持ちになる。そんな暖かい光景だったのだろう。

そんな事を考えながら、ベッド脇の時計を見る。

現在の時刻は5時25分。まだ起きるのには早過ぎる。

ならば今日の朝飯と弁当でも作ろう。各部屋には簡易だが、キッチンもあるのだ。申請さえしておけば食材も支給されるし、ここに持ってきた荷物の中には調理道具もちゃんと入っている。幸い、昨日の内に1週間分くらいの食材は申請し、その日の内に届いている。

フライパンを引っ張り出そうとベッドから起き上がると、隣のベッドに気が付く。

（そういや、更識さんと相部屋だったんだっけ）

そこには、安心しきった表情の更識さんが、すやすやと寝息を立てていた。……何か可愛いな、おい。

（更識さんの分、作ってあげようかなあ。どうしよう。弁当箱、予備のちっちゃい奴しかないしなあ。うーん……）

数分悩んだ後、いらなかったら俺が食べればいいかと思い、作ってあげる事にした。献立はオーソドックスに、ミートボール、卵焼きにタコ型に焼いたウィンナー、そしてふりかけご飯といった具合だ。弁当の調理は30分程度で終了。朝飯は……簡単に目玉焼きと食パン焼いてサラダ作る位でいいか。

「おはよ、篠ノ之君……」
「おっ、起きたか」

ちようど朝飯を作り終えた所で更識さんが起きたようだ。眠そつに欠伸をかみ殺し、彼女はすたすたと洗面所へ歩いていった。……あ、いけね。洗顔と歯磨き忘れてた。

更識さんが洗面所から出たのを見てから、俺もそれに続く事にした。
「もう一回寝る……おやすみなさい……すう」

眠気に耐えられなかったのか、更識さんはベッドに戻ってまた寝息を立て始めた。

……寝顔可愛いでござる。

「……御馳走様。美味しかった」
「そっか。そりゃ何よりだ」

朝食の方はいい評価を得られた。美味しいと言ってもらえると、やはり作ったかいがあったと言つものだ。

「あ、お昼の弁当も作つてあるぞ。口に合えばいいが」
「ありがとう……頂く」

よかった。ちゃんと受け取ってくれた。

「じゃあ、そろそろ行こうか」
「うん……」

俺と更識さんは並んで教室へと向かった。その途中、更識さんが話しかけてきた。

「そういえば……」
「何？」

「篠ノ之君の専用機つて、お姉さん——篠ノ之博士——が作ったの？」

「そうだけど、俺も製作には関わってる。結構俺が弄った所多いぜ」

まあ、俺がコアに触れたら機体そのものがほぼ出来上がったから、1から製作した物は実質武装位だが。

「あの……良かったら、私の専用機、見てほしい……」
「いいのか？ 仮にも国が企業の所有物だぞ？」

「製作の途中で、別のプロジェクトに人員を取られて、今は開発凍結に等しい状態……だから、私が引き取ったの」

「もしかして……一人で組み上げる気だったのか？」
「う、うん……」

うわぁ。そんなとてつもない事、一人の力じゃ絶対無理だろうに。

「……分かった。放課後にでも」
「ありが……とう」

そんな話をしていると、教室が近付いてきた。

「あゝっ！ 篠ノ之君が更識さんと歩いてるゝっ！」
「ええええっ！ 更識さん、ずるーい！」

……俺って、こんなにモテる人間だっけ。いや、単に珍獣扱いされてるだけかな。

「い、いや、これは」
『言い訳は無し！』

何故か更識さんが詰め寄られていたが、俺と一緒にいるせいなのだろうか。そうなんだろうな。ごめんね更識さん。

「授業の前に、まずはクラス代表を決めたいと思う」

1時間目。森本先生のその一声から授業は始まった。

「クラス代表というのは、1ヶ月後に開催されるクラス対抗戦等のイベントに出場する、厳密には違うが、一般的に言うところの委員長みたいな物だ。自薦でも他薦でも構わん。誰か？」

他薦ありとか、どう考えても俺だろ。男的な意味で。

「はい！ 篠ノ之君を推薦します！」

「私も篠ノ之君で！」

「私も！」

はい俺！。面倒くさいからやりたくないのに。

「一応聞きますけど、拒否権ってあります？」

「ある訳ないだろうが」

「で、ですよねえ」

結局無投票で、俺のクラス代表への就任が決まってしまった。畜生め。

そんな感じで始まった今日の授業は、まあ普通の授業だった。俺はたばっちと一緒にIS弄ってたし、動かし方や戦闘の伊呂波までこの身に叩き込んでいるから、この辺はただ単に復習でしかないが。

時は変わって、放課後。

「篠ノ之君……」

「分かってる。整備室でよかったっけ？」
「うん……行こう」

若干緊張したような面持ちの更識さんと共に、俺は整備室へと向かった。

そこでは作業中の上級生が数人おり、こっちに気付いて会釈を送ってきた。

それに軽く手を振って返すと、俺は上着を脱いで、中に着込んでいたISスーツだけの状態になる。作業着としてもISスーツは使えるのだ。

同じく更識さんもISスーツ姿になる。こちらはIS展開の為だが。

……にしても、女性用、ひいては通常のISスーツはやっぱり露出が大きい。

端から見ればスクール水着のようなそれを凝視する訳にもいかず、俺はつい目線を逸らしてしまう。

「何……？」

「いやー……あ、ISスーツって、露出度高いなって」

「！」

俺の言葉に更識さんは顔を真っ赤にし、上着で体を隠す。

「……えっち」

「……ごめん」

何とか鋼の理性を総動員して視線を戻すと、更識さんはISを展開した。

「おいで……『打鉄式』」

瞬間、彼女の体はグレーを主体とした装甲に包まれた。

ベース機となった防御重視ISの『打鉄』と比べ、ジェットブースター付のウィング型スカートアーマーに、打鉄よりも小型化された腕部装甲、そして肩部大型ウィングスラスターが大きな違いとして挙げられる。……なるほど、第二世代型最高傑作とまで言われる、デュノア社の『ラファール・リヴァイヴ』を参考にした高機動型、といった所か。だが――

「……確かに、この状態じゃまだまだだな」

「うん、装甲はともかく、武装もまだ……だから、手伝ってほしい」
「おう。まずはデータを見せてもらうぞ。えーと、ここだな」

打鉄式式の装甲を開き、その中に携帯端末のケーブルを接続する。同時に空中投影ディスプレイも起動、OSデータとスペックデータを出す。

「うーん、まずはOSセッティングかな」

二つキーボードを呼び出すと、次々にデータを入力していく。

「……すごい」

「たばっち――束姉さん――に比べれば、こんなのまだまだ……まあ、追い付こうとは思ってないけどね」

「何故？」

「何故って、割り切って自分に出来ることを見つけていった方が遥かに気が楽だし、損もしないからさ」

「割り切る……か」

何故か俺の言葉を反復する更識さん。……もしかして。

「更識さんって、兄弟いるの？」

「うん。お姉ちゃんがいる……完全無欠の」

「完全無欠、ねえ」

そんなの、世の中にいるわけ無いだろうが。

「完全無欠の人間なんて、どこにもいないさ。束姉さんだってそう
だ」

「えっ、そうなの……？」

「身の回りの事は壊滅的だし、部屋はグツチャグチャ。好きな事以外
は全くのダメダメだよ」

「そう……なんだ」

きつと彼女のお姉さんは、何でもできるような人間で、彼女がそれ
に引け目を感じていたか、周囲の人間に比べられて傷付いて行った
かのどっちかだろう。

実際、俺もよくたばっちと比較された。あれは正直——堪えた。

俺はあの人じゃない。

そんな簡単な言葉が思いつかなかったのは、その頃の俺が子供だっ
たからだろうか……？

でも、その頃の俺は確か、こう言っただけ。

『そうですか。俺もそうならいいですね。……多分無理だろう
けど』

俺は、『諦める』と言う選択肢を取った。諦めて、他に逃げてしまおう、と。

その代表格が、料理や掃除だったりする訳だが。

「まあ、気にしたら負け。自分の出来ることをやれ、ってね。ははっ、何格好つけてんだか」

これじゃ俺キザなだけの人間じゃねえか、恥ずかしい。

「……ありがとう」

「うん？ どうした？」

「……何でもない」

俺は何だか恥ずかしくて、その先の作業はめちゃくちゃ急ピッチで進めていったのだった。

（自分に……出来ることを……か）

打鉄式式のPICで浮遊しながら、簪は智樹に言われた事を思い出していた。

智樹は夕食の用意があると言って、30分程前に部屋に戻っている。

出来過ぎた姉を持ち、周りから比較され続けた妹（と弟）。

一方は塞ぎ込み、一方は潰されずに生きた。

（気分の問題……って事なのかな）

難しく考える必要は無かったのだ。

ただ単に、考え方を変えてやるだけで良かったのだ。

「……ありがとう」

彼女が再度口にした呟きは、誰にも聞こえないまま消えていった。

更識簪（後書き）

第4話終了です。

感想お待ちしております。

無茶に応えて特訓開始

「イギリスの代表候補生と決闘をするだ！？」

次の日の昼休み。学食で一夏達と昼食を食べていた俺は、一夏の言葉に啞然とした。

「また無茶をしゃがる……。どうしてそうなったんだよ」

「ヒント『女尊男卑』」

「OK、把握した」

要するにイギリスの代表候補生がめっちゃ高飛車でウザい奴だったって事か。で、耐えきれなくなつて反論して、「よろしいならば戦争だ」とばかりに素人に喧嘩売つてきた、と。

「で、俺に泣きついてきたって訳？」

「……言い方にすぐ不満があるが、まあそうなるな」

ちよつと気を悪くした一夏。

「イギリスだから、相手はBT兵器持ちである可能性が高いな……」

『BT兵器』

イギリスが試作中の、ビット型遠隔操作兵器。思考誘導によって、敵機の死角から攻撃をかける事が可能になる。

「俺が出来るのは対射撃訓練と機動訓練かな。箒ちゃん、頼みがある」

「な、何だ？」

一夏の横でうどんをすすっていた箒ちゃんがこつちを向く。

「今日から毎日夕食前の1時間、一夏を剣道で鍛えて欲しい」

何故剣道か、というと、白式の戦闘スタイルが完全に近接戦オンリーな為だ。今のところ装備しているのが、千冬さんの使用していたIS『暮桜』の兵器の後継型である『雪片式型』のみ。下手に射撃武器を付けると、一夏が対応出来ずに実力が伸びないだろうからだ。

「そ、それはいいが、何故夕食前なのだ？」

「それまではアリーナで訓練機を使った訓練を俺がする。それに、動いた後の夕食って、美味しいだろ？」

「そ、そうか」

一応だが、訓練メニューは立てておこう。

「一夏、これから毎日放課後に訓練だ。お前、専用機はあるか？」

「用意されるらしいけど、時間かかるってよ」

「そうか。お前の相手の特性は大体分かってるから、それを踏まえてみっちり鍛え上げてやる。相手は代表候補生。射撃でも格闘でも相手が上手だろう。けど、お前剣道の経験あるだろ？ だからそれに賭ける」

「頼む。やっぱり箒も智樹も、いざという時には心強いな」

瞬間、箒ちゃんの顔が真っ赤に染まった。

「そ、そうか。……心強い、か。ふふっ」

そのまま妄想の世界へ旅立ってしまった箒ちゃん。気付いた頃には、

もうすでに授業は始まっていたそうなの。

「智樹、頼む」

「おう、任されて！」

放課後、第二アリーナにて、俺は訓練機の一つ、防御型IS『打鉄』を着用した一夏と対峙していた。

「エクシア、展開」

俺の身体に、白を基調とした装甲が展開される。

「全身装甲……？ お前のIS、防御型なのか？」

「いや、近接格闘型だ」

一般にISは、シールドエネルギーによる絶対的な防御力を有しており、基本的には四肢や胴体の一部にしか装甲はないのだが、エクシアが全身装甲なのには訳がある。それは「エネルギー伝達」だ。装甲の内部には、GN粒子の伝達回路が、まるで毛細血管のように張り巡らされており、各部への粒子供給をスムーズに行う他、質量軽減効果の効率的な発生、さらには装甲強度の強化も実現するのだ。

「今日は基本的には飛行訓練だ。空を飛ぶ感覚がすっかり身に付くまで、いろんな飛び方をしてみる。分からない事があったらすぐに言えよ」

「分かった」

それから1時間ほど、一夏はアリーナを飛び続けた。
その結果、少々きこちないが、初心者とは思えない位の早さで彼は飛行をマスターした。

「今日はこれ位でいいだろう。明日は早速だが、戦闘訓練だ。メニユーは考えておく。さあ、次は箒ちゃんの剣道だ。行ってこい」
「おう。ありがとな」

一夏はアリーナのゲートまで戻っていった。
入れ替わるようにして、打鉄式式を纏った更識さんが、カタパルトに押し出されてアリーナ内へ飛んできた。……昨日システム組んだばかりなのに。

「更識さん、もう飛んで大丈夫なのか？」
「多分……。今回は、テスト機動でデータ収集」
「そうか。万一システムトラブルとかなったら危ないから付き合ってやるよ」
「うん……。ありがとう」

俺の言葉に少しだけの笑みで返すと、彼女はアリーナ内を飛び始めた。

10分ほど経った辺りだろうか、不意に打鉄式式が動きを止める。

「どうした？」
「加速時のシールドエネルギーを試験展開したら、いきなり止まった」

打鉄式式にすぐさまリンクし、シールドエネルギーとPIC、スラストのデータを出す。

「シールドエネルギーとPICが干渉しちゃってるな。動かない訳だ。更識さん、シールドエネルギーの発生範囲をPICからずらしてくれ。俺はPICとスラスターの調整をする」
「分かった」

更識さんは球体型キーボードを呼び出すと、それを使って調整を始めた。

（たばっちも似たようなもん自作してたな）

普通のモデルでは指を動かす時間が惜しいんだとか。

作業は2分ほどで終了し、彼女はまた空に飛び立った。

「今日は……付き合ってくれて、ありがとう」

「当然。友達が頑張ってるのを放っては置けないからな」

数時間後、自室で俺達は夕食を食べていた。更識さんが作ってくれたそれは、どれもしつこくない味付けで、非常に俺好みの味だった。

「にしても、いい味付けだ。俺の好み、更識さんに教えて無いよな？」

「お口に合ったのなら、良かった」

そう言う更識さんの顔は、ほんの少しだけが笑っている。……意

外と家庭的な子だなあ。

俺は肉じゃがを口に入れ、茶碗の残りのご飯も一緒に口の中に入っ
込んだ。

「……うん、おかずが美味いと飯も美味い。おかわり入れて来よ
と」

炊飯器を開けようとして、ふと思った。ご飯のおかわりが欲しいと
思ったのは、一体何年ぶりだろうか。

たばっちと旅に出た後、俺はおかわりをした記憶が無い。自分の料
理をそこまで美味しいと感じた事が無かったし、何より節約も兼ね
ていたのだ。

今は節約する必要は無いし、それに更識さんの料理は美味い。

（まあ、いいか）

俺は茶碗にご飯を軽く盛ると、更識さんの料理をもう少し堪能する
事にした。

「うおおおおっ！」

「甘い！」

翌日。一夏の訓練二日目。俺はエクシアのGNソード・ライフルモ
ードで、粒子ビームを一夏の打鉄目掛けてぶっ放していた。

「甘い！ そんな事じゃ、奴の射撃はかわせん！」

おそらく相手のISは、イギリスのティアーズ型。遠隔操作兵器によるオールレンジ攻撃が特徴の第三世代型だ。一夏に勝ち目はほぼ無いと言っているだろう。

敗色濃厚。しかし、諦める訳には行かぬ。

これは辛い試合になると、俺は溜め息をついたのだった。

無茶に応えて特訓開始（後書き）

第5話終了。

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3869x/>

IS～頑張れば何でもできる！～

2011年11月11日23時20分発行